

大学で求められる「レポート」とは何か ——2021年度新入生と大学教員との認識の違いについて

山 梨 有希子

はじめに—レポートには学生も教員も困っている

大学に入学したのち、あるいは入学前から事前準備課題として課されることもあるレポートに困惑する学生は多数存在する。何をどう書けばよいのかわからない、どうやって文字数を埋めたらよいのかわからない、そもそも何を求められているのかわからない等、学生によって困っているポイントも様々である。

白百合女子大学に2021年度に入学した1年生が前期のうちに履修する可能性のある授業は、シラバス検索をしてみた結果、339コマ存在するⁱ。そのうち同一タイトルのもと複数開講される必修科目が多数あり、それらは基本的に授業内容および成績評価のあり方は共通していると考えⁱⁱ、授業数は一つとみなしそれらの重複分を除くと、1年生が前期に履修する可能性がある授業は半数近くまで減るものの、総計156コマ用意されていることになる。

この156コマのうち、成績の評価方法にレポートが採用されている授業は102コマあり、全体の約65%にのぼった。専攻する学科によっても異なるが、大学に入学したばかりの1年生が前期中に書かなければならないレポートの数はそれなりの量に達するであろうことは想像に難くないⁱⁱⁱ。学生は毎日の授業でリアクションペーパーを複数書き、学期末には多岐にわたるジャンルの授業でレポートを課されるというわけである。

それだけ書く機会が与えられれば当然学生のライティング能力が伸びるのかと言えば、そうでもないようである。学生がレポートを書けないと嘆く大学教員は多いし、それを裏付けるかのように、2019年時点で97.4%を超える大学で実施されている初年次教育科目でもっとも扱われている内容は、「レポート・論文の書き方などの文章作法を身につけるためのプログラム」である（文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室2020：12）。

学生も教員もレポートには困っている。では、どこに問題があるのだろうか。初年次教育科目で扱われる文章作法を身につけるプログラムの内容に問題があるのか、それとも問題は他に存在するのか。まず、それを明らかにする必要があるようである。そのためには、学生はレポートの何に困っているのか、教員は学生のレポートのどこに問題があると考えているのかを把握することから始めなければなるまい。

『書くのが苦手を見極める』（2010）や『ライティングの高大接続』（2017）といった著作を通じて、大学生はレポート執筆を前にして何に困っているのか、本当に文章を書くのが苦手なのかを継続的に調査・研究している渡辺哲司は『大学への文章学』（2013）でこう述べた。

大学における「書けない」問題の不幸なストーリーは、最近の学生をよくわかっていない教師が昔ながらの“大学らしい”流儀で気軽にレポート課題を出すところから始まる。（25）

そこで、本論文では2021年4月に実施された白百合女子大学全新入生へのアンケート調査を元に、①大学入学直後の学生たちが持っているレポートに対するイメージを明らかにするとともに、②教員たちが本当に「昔ながらの“大学らしい”流儀で気軽にレポート課題を出している」のかを、2021年度のシラバスに記載された「評価方法」「評価基準」から探ること

とした。さらに筆者が2020年度後期に担当した「クリティカル・ライティング入門」を受講した1年生53名へのアンケート調査から、③学生たちが大学入学前にどのようなライティング教育を受けているのか、その一端を明らかにする。これらの作業を通じて、大学という場で起きているレポートをめぐる問題がどこあるのかが明らかになるだろう。その上で白百合女子大学の初年次教育科目において何を優先して教えるべきかを考える一助としたい。

1. 2021年度新入生がもつ「レポート」イメージ

上述した渡辺は『ライティングの高大接続』において、大学という場で起きているレポートをめぐる問題を次のように結論づけた。

一般にレポートで要求されるものは、あるテーマについて調査、観察したことを記録、報告すること、それに基づいて自身の考えや意見を述べること等である。おそらく問題なのは、それらの要求が教師から見れば当たり前のこと、出題文や条件から容易にわかる説明不要のことであるのに対し、学生たちにとっては必ずしも自明なことではなく、察するのが難しいということだ。(141)

実際、大学生たちはレポートをどのようなものであるとらえているのだろうか。筆者は、2021年4月8日から始まった前期期間中に開講される白百合女子大学の初年次教育科目の一つ「パブリックリテラシー」（全学必修科目）の初回授業にて、アンケートを実施した。同アンケートでは、大学でやりたいこと、大学に入って不安なことなどを聞くとともに、「これまでにレポートを書いたことがありますか」、「レポートとはどのような文章のことを言うのか。定義してみてください」という項目を用意した。総数452名から回答があり、「これまでにレポートを書いたことがある」と

答えた学生は60%程度いることがわかった。

では、学生たちが書いたことがあるという「レポート」とはどのようなものなのか。「レポートを書いたことがある」と答えた学生たちの記述からその特徴を取り出すため、本稿ではKH Coder(Ver3.Alpha 8)を用いて計量テキスト分析^{iv}を実施した。以下がその結果である（頻出語の抽出、共起ネットワークの結果のみ記載する）。

表1. 「レポート」の定義において5回以上用いられていた言葉

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
自分	180	客観	8
文章	95	結論	8
意見	74	根拠	8
考え	67	事柄	8
調べる	47	自身	8
テーマ	37	物事	8
述べる	35	主張	7
報告	28	知識	7
感想	25	踏まえる	7
考察	25	分かる	7
研究	21	問題	7
課題	19	記す	7
事実	19	疑問	7
授業	17	交える	6
結果	16	示す	6
論理	15	説明	6
学ぶ	14	伝わる	8
考える	14	与える	8
伝える	14	論文	8
内容	13	解釈	8
沿う	11	指定	8
言葉	10	実験	7
理解	10	収集	7
基づく	9	詳しい	7
思う	9	相手	7
資料	9	調査	7
情報	9	文献	7
題	9	用いる	7
文	9	論じる	7
仮説	8		

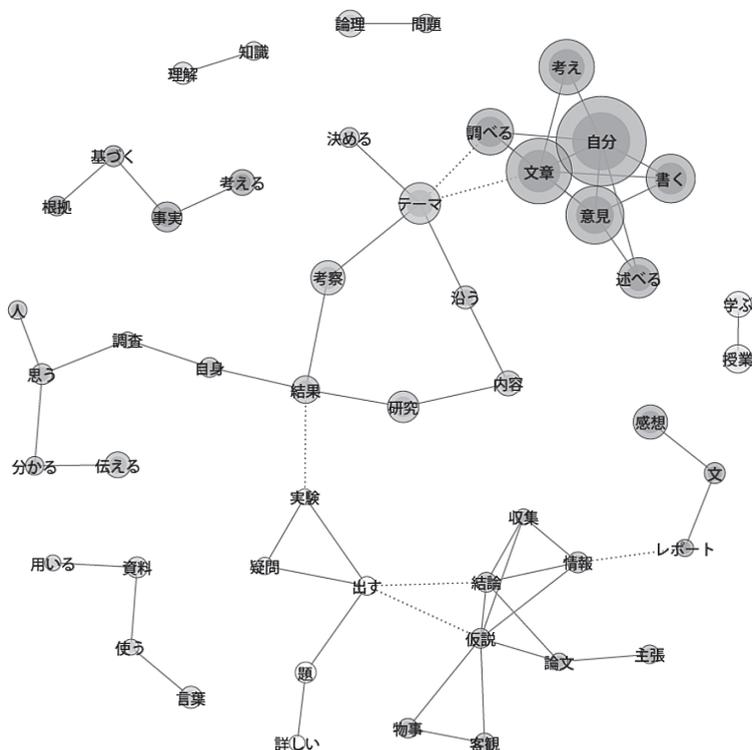


図1. 「レポート」の定義に出現する語の共起ネットワーク

単純化することはできないが、「レポートを書いた経験がある」と答えた学生においては、レポートとは「自分の意見／考えを書く／述べるもの」と答えた割合がもっとも高いことがわかる。「レポートを書いた経験がない」と答えた学生も含めると、「レポートには自分の意見が必要である」と考える学生は2021年度入学生においては222名、全体の49%を占める。

ただし、「自分の意見／考えを述べる」だけではなく、そこに「客観的な根拠とともに」「事実に基づく」いて、というような条件が付随した形でレポートの定義を行ったのは、そのうちの109名であったことに注意が必

要である。つまり、レポートには「自分の意見／考えが必要だ」と考える学生のうち、半数以上の113名の定義には「事実に基づいて」や「調べたことを元に」「根拠とともに」という言葉は見当たらず、単に「自分の意見を述べたもの」と答えているのである。

2. 大学教員が求めるレポートのイメージ

一方の大学教員はレポートをどのようなものと捉えているのだろうか。

白百合女子大学の2021年度前期に1年生が履修可能な科目で「評価方法」「評価基準」にレポートの記載がある科目は102件ある。これらの「評価方法」「評価基準」に記載されている文言をすべて抽出しその内容を分析することで、教員が学生に求めているレポートのイメージの一端を明らかに

表2. 「レポート」の評価方法・基準の記載に5回以上出てくる言葉

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
授業	47	知識	9
自分	46	レポート	8
理解	38	基づく	8
内容	34	考える	8
適切	28	作品	8
展開	27	意見	7
課題	24	視点	7
考え	24	独自	7
論理	23	示す	6
テーマ	22	自ら	6
扱う	17	主張	6
考察	17	説明	6
表現	16	文章	6
設定	15	明晰	6
正確	13	論	6
的確	11	論旨	6
持論	10	述べる	5
記述	9	深い	5
言葉	9	調査	5
構成	9	発表	5
自身	9	問題	5

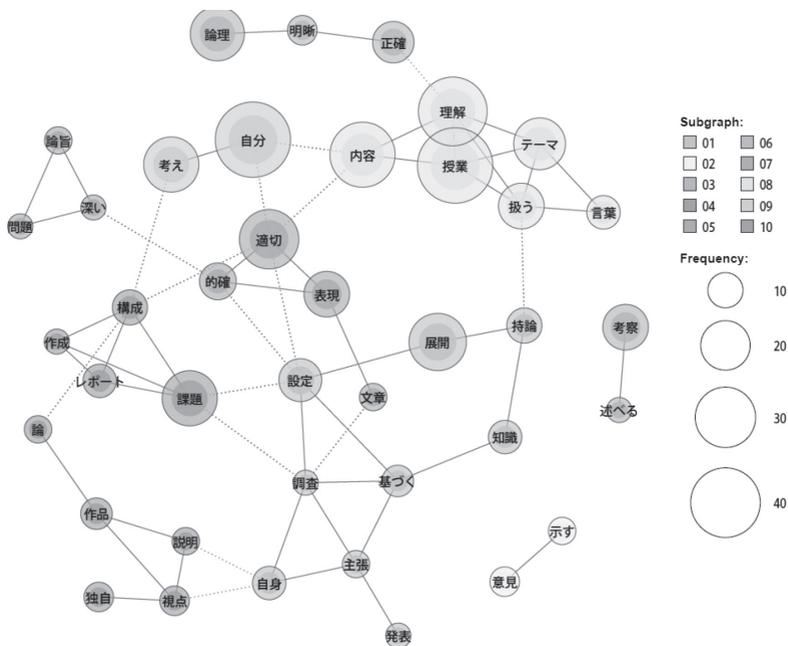


図2. 「レポート」の評価方法・基準の記載に出現する語の共起ネットワーク

することができるはずである。特に「評価基準」は、教員が考えるよいレポートの裏返しであると考えられるからである。

図2から、レポートを授業評価にもちいる授業のシラバスに記載されている「評価基準」では、「授業内容、授業で扱ったテーマを理解する」「適切な課題設定」「調査研究」「適切な文章・表現」「論理」「考察を述べる／意見を示す／自身の考え」といった言葉が多く用いられていることがわかる。まとめるならば、授業のテーマを理解した上で、適切な課題設定を行ない、調査・研究した上で、自分の考えを適切な表現で述べることを、大半の大学教員はレポートに求めていると考えることができるだろう。

これは一般的なレポートの書き方指南書でよく扱われる典型的なレポー

ト例、「論証型レポート」と呼ばれるものとはほぼ内容を一にしている。

繰り返しになるが渡辺（2017）は、この一般的にレポートで要求されるもの（あるテーマについて調査、観察したことを記録、報告すること、それに基づいて自身の考えや意見を述べること等）が、学生たちにとっては必ずしも自明なことではなく、察するのが難しいのだと述べていた。これは2021年度の白百合女子大学入学生および前期中に1年生が履修する可能性がある教科を担当する教員に当てはまるのだろうか。

3. 昔ながらの“大学らしい”流儀で気軽に課されるレポート

白百合女子大学のシラバスには「評価方法」のみならず、「評価基準」も明記することが求められている（たとえば、「評価方法」授業への参加度40%、リアクションペーパー：20%、最終レポート：40%。「評価基準」授業への参加度：授業中に積極的に質問をしたりグループ活動を行っているか、リアクションペーパー：単なる感想ではなく授業で学んだことを理解し、それに対して自らの考えを記述しているか、最終レポート：課題設定がなされており、授業で扱ったテーマを理解し、持論を展開できているか、など）。

一見して、レポートのどのような部分を評価するのかについては、学生に対してかなり明確に示されているとも言えるだろう。その意味では、教員は「昔ながらの“大学らしい”流儀で気軽にレポート課題を出」（渡辺2017:141）しているわけではなさそうである。しかしながら、学生のレポートイメージと、シラバスから抽出できる教員側のレポートイメージにはやはり大きな違いがあることも明白である。

前述の通り、「客観的な根拠とともに」自分の意見を示すものがレポートであると答えた新生は全体の24%に過ぎなかった。また単に自分の意見を示すのみならず、「課題に沿って調べたことをまとめて」自分の意見

を示すとした答えを注意深く読み取れば、「自ら適切な課題を設定する」ところまで意識をしている学生はほぼいないと考えられる。すなわち、あくまで教員が伝えたレポート課題にそって書くものだと考える学生が大多数を占めるということである。

しかし、多くの大学教員はおそらくこう考えているのではないだろうか。「レポートとは教員があたえたテーマにそって自ら問いを設定し、情報を集め精査し、事実を踏まえて論理的な流れで自らの考えを述べるものである。それは大学生なら知っていて当然のことである。したがって、学生にあえて明確に指示する必要はないし、初年次教育科目で学んでいるはずだからこの授業で教える必要はない」。

だからこそ、レポート課題を出すにあたってわざわざ「教員が示すのは大きなテーマなので、そこから自分で問いを設定せよ」とか、「最低でも3冊くらい文献を読みなさい」とか、「序論・本論・結論の構成を明確にしろ」といった（教員にとっては）当たり前過ぎる指示は出さない。

しかしながら、上述したとおり、大半の学生にとってレポートとは自分の意見を書くものであった。教員から与えられた大きなテーマを前に、多くの学生たちは「そんな大きなテーマで意見を書けと言われても…」「自分の意見だけでそんなに文字数は埋まらないしあとは何を書けばよいのか」「そのテーマで何か考えたこともないから意見も特にないだけど」と途方に暮れるのである。

2020年度後期に筆者が担当した授業「クリティカル・ライティング入門」でおこなったアンケートでも、「何が求められているのかわからない」と答える学生の声があった。2020年度前期の授業を振り返り、とても苦労したレポートがあったかを聞いた後、「そのレポートは、あなた自身の（独自の）考えや意見を述べることを求めるものでしたか」という問いに答えてもらったところ、23.6%の学生が「わからない」と答え、さらに、「そ

の課題は、いろいろな文献を読んだり情報を集めたり、調査したりすることを求めていますか」という問いには、34%の学生が「いいえ」、34%が「わからない」と答えている。

調査対象者数が約50名と、2020年度新入生の約1割弱程度に対するアンケートであるため、それを1年生全員に敷衍して考えることはできないだろう。しかし、教員からのレポート課題を前にして何をどうすればよいのか明確に分からない状態にあり、困惑する少なからぬ学生の姿が見てくる。

とはいえ、特に2020年度は全面遠隔授業の中で周囲との情報交換もままならない中、不安にさいなまれた学生が多かったという側面がアンケート結果に少なからぬ影響を及ぼしているだろうことには注意が必要だろう。

他のレポート課題でも同じことをよく感じるが、出題された内容がとてつ抽象的なものが多く「自分でテーマを決めよ」や、「好きな作品を選び」など自由度の高い課題をとてつ負担に感じた。リモートで授業していると全てが手探り状態でどのような解釈で周りの生徒がやっているのかや、先生がその講義の中で求めている理解を自分が出ているのか常に不安な中やっているから自由度が高いと困ってしまう。

これは、「2020年度前期の授業を振り返り、とてつ苦労したレポートがあったか」を聞いた時に返ってきた声の一つである。

その自由度こそ大学なのだと、だからこそ自ら問いを立てることが大学での学びにとって大きな位置を占めるのだということに疑問を持つ大学教員はいないであろう。しかしながら、それが学生にとっては難しいのである。また、初年次教育科目において問いの立て方を取り上げたとしても、すぐに実践・応用できる学生はそれほど多くない。

さらに、シラバス調査からは、同じレポートの語のもとに多様な内容が

示されている実態もうかがえる。2021年度前期に開講された1年生が履修可能な授業の中におけるレポートの評価基準には次のような記載が見受けられた。(文末など、適宜省略している)

- 授業で扱ったテーマについて自分の言葉でまとめることができる
- 自分の考えを他者に適確に伝えることができる
- 自分とは異なる他者の意見を正確に理解し、表現することができる
- 課題に対して自分の考えを記述できる
- 学んだことをもとに自らの考えを記述する
- 授業で学んだことがらを応用する能力
- 授業内容を正確に理解しているか

これらの基準からは、学生からすれば自ら課題を設定したり、調査・研究をする必要があるとは読み取れまい。授業で学んだことを一つ取り上げてわかりやすくまとめればレポートとなると学生が考えても不思議はないと思われる。また実際に、教員の意図として課題の設定や調査・情報収集を求めている場合もあるだろう。

同じレポートとは言え、明らかに授業内容の正確な理解だけを求められる例もあるのである。学生がますます何が正解か分からないと混乱するのも致し方ない状況だと言えよう。

初年次教育科目でレポートの書き方を十分に扱っていないのではないかと訝る向きもあるかもしれない。それについては担当する教員の立場からすれば、適切に扱っているとお答えするしかないが、一度習ったくらいで完璧なレポートが書けるようになる魔法は存在しない。繰り返し書き、その度に適切なフィードバックを受け、レポートとは何かを学生たちは身をもって理解していくのである。そうだとすれば、教員側が個々の授業で課

すレポートにおいて、丁寧な指導が繰り返されていく必要があるだろう。

昔ながらの“大学らしい”やり方、それは「言われなくとも」自分で課題を見つける、そのための情報を集め自分の意見を書くのがレポートでは当たり前だと考えている教員の固定観念のことを指す。しかしながら、レポートという同じ言葉を使いながら、求めるものが多岐にわたるという状況がある以上、レポートの出し方について教員は再考する必要があるであろう。

4. 大学入学前に学生は何を書いているのか

ここまで、「レポートには自分の意見が必要である」と考える1年生の49%と、教員との間に横たわる溝を見てきた。しかし、では残りの51%との間に溝はないのだろうか。

「レポートには自分の意見が必要である」と答えた学生が約半数であったとするならば、残りの半数はレポートをどのようなものだと考えているのか。実はその残りの半数は「学習の成果をまとめ、報告する」ものをレポートと考える一群に属していることがわかっている。「学習の成果をまとめ、報告するもの」をレポートであると答える1年生は2021年度新入生全体の45%を占めるのである。

このイメージは、大学入学前に学生たちが学んできた内容に直結している。一般的には2016年度に大学に入学した学生から、国語のみならず課題探求型授業の促進を目指して設けられた総合的な学習の時間において文章を書く機会が増えているとされている。この2つの科目を通して、学生は主に書く経験をしてきていると考えられる。

それぞれの教科において具体的に学生がどのような書く経験をしたのか、高大接続の観点から国語に注目してその実態を調査している渡辺・島田（2017）と、課題探求型授業の影響を調査している大阪大学（2019）のケースを概観することで全体像をつかんでおこう。

国語でのライティング経験

渡辺・島田（2017）は、「①事実に基づいて論理的に述べるタイプの文章であること。②生徒が実際に、もっぱら一人で書くもの（作業課題）であること」（38）をレポートもしくは「類縁の文章」とし、2016年当時の日本の高校で使用されている国語教科書において教示されているレポートの定義を抽出し、平均的な定義を組み立てた。

それによれば、国語教科書におけるレポートの平均的定義は次のようになると思われる。

調査や研究の結果としてわかった事実（実験結果など）を他者に伝える（報告する）文章（41）

端的に言えば、学習の成果（授業で学んだこと、与えられた課題について調べたこと）を他者にわかりやすくまとめる文章だということができるようである。

筆者が担当する選択科目「クリティカル・ライティング入門」において、高校での国語におけるライティング経験について細かくアンケートをとったところ、³「情報を収集、整理し、正確かつ簡潔に伝える文章にまとめる」経験を「十分に学ぶ機会があった」「まあまあ学ぶ機会があった」とした学生は合わせて55%となった。一方、大学で求められるレポートに比較的近いと思われる、「題材を選んで考えをまとめ、書く順序を工夫して説明や意見などを書く」経験を「十分に学ぶ機会があった」「まあまあ学ぶ機会があった」と回答した学生は32%であった。

国語の授業において、学生たちは自分の意見を書くというよりも、情報を集めてまとめる練習をより積んでおり、それをレポートであると認識している実態が浮かび上がってくる。

課題探求型授業でのライティング

では、もう一つの課題探求型授業ではどのような書く経験をしているのだろうか。2009年に公示された学習指導要領に基づき、2013年度から高校では「総合的な学習の時間」が導入され、課題探求型授業が推進されるようになった。それにしたがえば、2016年度大学入学者から、大学入学前にこの課題探求型授業を受けている可能性は高い。さらに、2018年公示の高校指導要領では、2019年の第1学年から探求学習のさらなる充実を目指した「総合的な探求の時間」が先行して行われてもいる。この変化が大学新入生にどのような影響をもたらしているのかを把握するために大阪大学の吉本ほか（2019）が、新入生を対象におこなった調査がある。

探求学習において行われているライティング指導は、探求の過程とされる「①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現」（文部科学省2009）のうち、特に④の部分で実施されていると考えられる。これについて上述の大阪大学の調査によれば、「小論文以外で実験や調査をもとに文章をまとめたことがありますか」という問いにたいし、「はい」と答えた回答が2017年には45.0%だったものが2019年には6ポイント減少し、40.7%にまで減ったという。課題探究型学習が増えているとすれば、結果としてレポートなどの文章を書く機会が増えているのではないかと思われるのだが、そうではなかったわけである。その原因として挙げられているのは、グループ研究が増えた結果、作業分担が生じ一部の生徒が「まとめ・表現」を担うケースが増えているためではないかというものであった。

先述した「クリティカル・ライティング入門」でのアンケートからも、グループでの探求学習をそれなりに経験している学生がいることが判明している。「グループで協力してあるテーマについて探求する」経験が「よくあった」「少しあった」と答えた学生は合わせて72%、その「探求の成果をグループで協力して発表」した経験が「よくあった」「少しあった」

学生は81.2%に達した。

とはいえ注意が必要なのは、その「まとめ・表現」が意味するのは、文章でまとめるというよりも、図表にしたり、それをプレゼンテーションするという場合が多いのではないかということである。実際に、大阪大学の調査で「まとめた経験の内容」として最も多かったのは「プレゼンテーションやポスターなど発表用の資料」であったという。

「クリティカル・ライティング入門」でのアンケートでも、「口頭発表（いわゆるプレゼン）の方法」を学んだ経験が「よくあった」「少しあった」と答えた学生は71.7%であったが、「書く順序を工夫して説明、意見などを書く」経験が「よくあった」「少しあった」と答えた学生は30.2%であった。白百合女子大学の1年生においても同じことが起きているものと考えて差し支えないだろう。

以上のことから分かったのは、2021年度の1年生は、自らの意見を書く経験よりも、学習の成果をまとめる経験を多くしており、またそれをレポートであると考えている可能性が高いということである。

その課題探求学習において、「大きなテーマのもと、具体的な探求のテーマを自分（たち）で考えて設定する」経験となると、「なかった」が34%と増える（「クリティカル・ライティング入門」でのアンケートによる）。2021年度の新入生が定義した「レポートとは何か」の記述の中には、「課題について調べて…」「与えられたお題について…」という言葉が多用されていた。課題や題は教員から与えられることが多かったのではないかと推察されるのである。

半数近い新入生が「学習の成果をまとめ、報告する」ものをレポートと考えるのは、大学入学前までの学習の成果である。大学教員はまずこの認識を共有するところから始めなければならないだろう。

5. 学生は何かよい「レポート」なのかを知っている

ここまで大学教員と1年生の間に見られるレポートをめぐる齟齬を見てきた。レポートに困惑する学生たちではあるが、しかし同時に学生たちのレポートを見分ける目には確かなものがある。

筆者は白百合女子大学の初年次科目「パブリックリテラシー」において2020年度、2021年度と続けて、他者が書いた3つの「レポート」の評価をするという課題を学生たちにやってもらっている。具体的には以下の通りである。

【課題】「ジェンダー」に関する授業のあとで、次のような指示でレポートが課されたとします。「身近な気になる問題を取り上げ、授業で学んだジェンダーという概念を用いて、1000字程度で論じなさい。」提出されたレポート1・2・3について、あなたが教員だった場合、それぞれどのように評価するでしょうか。それぞれ点数をつけてみてください。さらに、なぜその評価になるのか理由を述べてください^{vi}。

【レポート1】生物学的・解剖学的な男女の違いを示す「性」(sex)にたいして、社会的・文化的に形成される男らしさ、女らしさを表す概念が「ジェンダー」(gender)である。1968年にストーラーらが指摘し、ミレットらが差別的分析に適用した。ジェンダーに基づく隔離としては、女性にヴェール等の着用を義務付けるイスラムの社会的慣習が代表的だが、「男は仕事、女は家庭」という近代型の性別役割分業もある。…中略…このように、ジェンダーは、21世紀の私たちの生き方を考えるうえで、キーとなる概念である。身近な現象も、ジェンダー概念に基づいてあらためて検討し直すことが重要であるといえる。それによって、問題の背景を分析するためのあらたな視点を獲得することもできるのではないだろうか。私も今

後はこのような視点を大切にしたい。これが今回のジェンダーについての授業を通じて考えたことである。

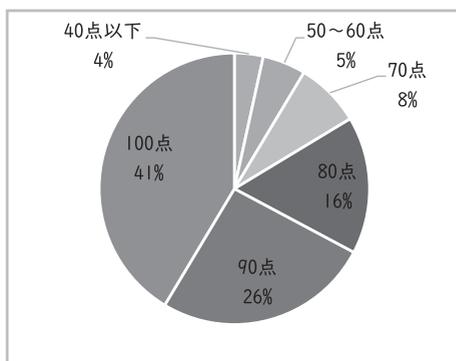
【レポート2】最近、ジェンダー概念に基づく労働・教育等の再検討が流行っているようだが、私は、やはり男らしさ・女らしさというのは自然で大切なことだと思う。自分の経験からいっても、家庭的な幸せは母親の愛情のおかげだと思っている。たとえば上級生にいじめられて帰宅した時、母がいてくれて本当にうれしかった。私のまわりの人々もみんなたいていそう思っている。だから、男女の役割分担を再検討せよなどという人は、きっと感情的になっているに違いない。友人のひとりも、両親が共働きで子供の頃はさびしかったと言っている。そういう人はかなりいるだろう。いま少年犯罪や「キレる」子供が急増しているが、これらの現象は、女性の社会参加とまさに同時進行しているのではないか…中略…このように、人々の正直な気持ちを重視するなら、やはり家庭を大切にしようがよいのは当然の考え方である。今こそ、人間性の本質に根差したこのような考え方に基づいて、もう一度身近な問題から社会を見直してみるべきであると、私は考える。

【レポート3】「21世紀は女性の時代である」「現代は、男性より女性の活躍の方がむしろ目立っている」という見解がある。はたして本当にそうであらうか。私は、テレビを見ている時に、「男性と女性では登場する場面が違うのではないか」という疑問をいただいた。そこで、5月7～10日の4日間、NHKと民放の報道番組を毎日1番組ずつ、計9時間20分録画し、その中で男女の発言を分析してみた。アナウンス部分の発言は除き、コメントの内訳は、男性が68%、女性が32%であった。一方、「すごいですね」「なんてひどいんでしょう」といった報道内容に対する情緒的なコメント

は、73%が女性、27%が男性によって行われていた。また、…中略…このように、男性は情報を与えたり番組の方向性を示したりする場面での発言が多く、女性は感情を表したり質問をしたりする場面での発言が多かった。…中略…テレビの中の男女がどのような役割を担っているかは、一般の人々の女性像・男性像に影響を与える。現状においては、テレビメディアはある一定のジェンダー役割を反映し、それを再生産していると私は考える。

この3つのレポートを学生たちに評価してもらったわけである。2020年度に筆者が担当した5クラス115名からよせられた回答の概要を以下に示す。

【レポート3】に対する評価



平均点88.6点

中央値95点

最頻値100点

83%の学生が80点以上と高得点をつけていることがわかる。これらの高得点をつけた学生がその理由について述べた文章に表れた言葉を細かく見ると、以下の言葉が上位にあがった。

- 疑問
- 調べる
- 分析

- 結果
- 意見

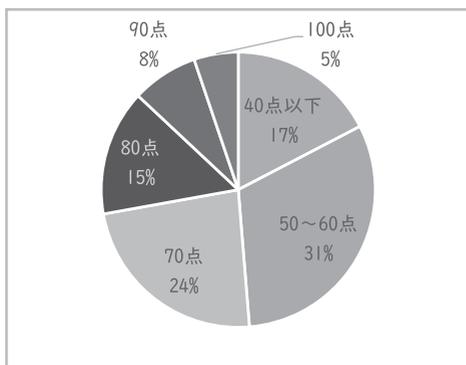
自分で疑問もち、それを調べて分析した結果、あるいは意見を述べていることが高く評価されている。これはまさにレポートに必要な要素であることは言うまでもない。

次は、ある学生による【レポート3】に対する評価である。

身近に気になる問題をジェンダーという概念を通して自ら検証し分析することができていて、具体的な数字も出しているため説得力がある。主観に基づかない分析結果から理解できることをしっかりまとめ、それから考えられるテレビメディアが与える影響を論じている。「身近に気になる問題」について筋が通る結論を出している。

「主観に基づかない」という言葉が使われているなど、レポートとはどのようなものであるのか、正確に理解出来ていることがうかがえるだろう。

【レポート2】に対する評価



平均値63.8点

中央値70点

最頻値70点

【レポート3】と比べて、80点以上をつけた学生は28%と、評価は低調である。点数を高くつけた学生が理由において用いた言葉の上位5つは次の通りであった。

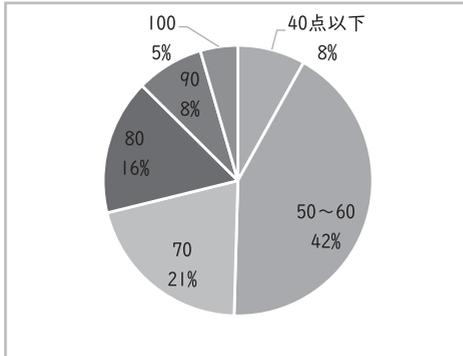
- 身近な問題
- 考え
- 意見
- 感じる
- 述べる

【レポート3】で用いられた言葉とは全く異なる言葉が並んでいるのがわかる。まず、疑問や分析といった言葉が出てこない。一人一人が書いた評価を詳細に読むと、「身近な経験を取り上げているというところ」、つまり課題にそってレポートを書いた点を高く評価している学生が多いことがわかる。

また、自分が「感じる」こと、それを自分の「考え」として「述べ」ていることが良かったという学生が高い評価をしていることも判明した。

一方で、60点以下をつけた、つまり低評価を下した学生による評価だけを抽出し、そこで述べられている言葉で多く用いられていたのは、「感想」「主観」であった。「単なる感想である」「自分の考えを押しつけているだけである」といった厳しい言葉が並ぶことからわかるように、レポートは感想を書くものではない、主観的な内容はレポートに相応しくないと考える学生が多いからこそ、【レポート2】の評価は低くなったのだと考えられるだろう。

【レポート1】に対する評価



平均点64.7点

中央値65点

最頻値50点

【レポート1】に対する評価は、平均点で見れば一番低い結果となった。しかしながら、40点以下をつけた学生は【レポート2】の17%と比べると8%と少なく、学生の言葉を借りれば、「可もなく不可もない」ものであるとみなされたようである。こちらも80点以上と高く評価した学生の言葉をピックアップしてみると以下ようになった。

- 身近
- 問題
- 取り上げる
- ジェンダー
- 概念

【レポート2】と同じく、課題にそって授業で学んだ「ジェンダー」「概念」をまとめ、「身近」な「問題」を「取り上げ」ていることに評価が集まった。とはいえ、「授業で学んだことが理解出来ていることはよくわかるが、それをまとめただけではレポートにはならない」と述べる学生たちが50～60点という当落上にある点数をつけている。

以上の結果から、自分がそのように書けるかどうかは別として、学生たちは良いレポートがどのようなものであるかおむね分かっていると言えるだろう。大学入学前の学習の影響もありレポートをまとめて報告するものであり、あるいは単に自分の意見を書くものとする1年生が多いとはいえ、3つのレポートに対する分析・評価をみれば、学生たちがレポートを評価する目を持っていることに疑いはない。

だとすれば、やはりまず必要なのは教員側の意識改革となるだろう。大学入学前に学生たちが学校教育の中でどのような書く経験をしてきたのかを理解し、大学の多岐にわたる授業で課されるレポートの多様性を認識した上で、自らの意図を明確に示したレポート課題を出すことの重要性が教員の間で共有されるべきなのではないだろうか。

6. 結びにかえて—自分なりの意見、独自の視点とは何か

ここまで、大学入学直後の学生たちが持っているレポートに対するイメージを明らかにし、それが教員たちの意図するレポートとどう異なるのかを、教員の「評価基準」から分析、その断絶は学生たちが大学入学前どのようなライティング教育を受けているのかを認識することなく課される多様なレポートにあることを指摘してきた。

教員側が学生たちとの認識の違いに気づき、適切な措置を取るようすべきことは当然であるが、その上で最後にレポートをめぐる一筋縄ではない問題について考察を加えておきたい。それは自分の意見にオリジナリティが必要かという問題である。

筆者の理解としては、論文にオリジナリティは必要であるがレポートには必要がないと、とりあえずの線引きをしたいところであるが、他とは違う自分独自の視点／意見をもつ、それを最後に示すということに対する学生たちの重要性の認識には根強いものがあると感じている。

たとえば次のような例からそれがうかがえる。先述の【レポート3】に対する学生の評価である。

【自分の意見を述べている】

男性と女性に対して、テレビ番組を例として出し、読み手側からもわかりやすいたとえを使ったり、自分の意見も述べているため、90点にしました。(傍点筆者)

【自分の考えをもっと入れるべき】

世の中にある見解に疑問を持ち、自ら統計を取って分析をしているのが素晴らしいと思いました。身近な気になる問題取り上げることはできていますが、最後にテレビとジェンダーについてだけしか書いてないので自分の考えをもっと入れるべきだと思いました。最終的に自分はどうか考えたかが一番大切だと思うので、その部分を足せば一気に良くなると感じました。(傍点筆者)

同じレポートを読んで「自分の意見を述べている」と考える学生と「述べていない」と考える学生がいるのである。「自分の意見を述べる」ことが重要だと考えている点では同じなのだが、自分の意見がどのようなものなのかについての見解が異なるのである。

この違いは、自分の意見を、自分で立てた問に対して客観的な根拠から論理的に導かれた結論と捉えるのか、それとも論理的に導かれた結論に対する自分なりの独自の見解と捉えるのか、の差だと思われる。参考になるのは次の学生の評価である。

今回のテーマに関することを自分なりに調べてまとめているのはすご

いなと思ったが、その結果を元にして、これから社会がどのように変わっていくべきなのかが述べられていなかったからだ。(傍点筆者)

導き出された結果／結論と、それを受けて自分がどう思うのかが、別のものであると捉えられているのである。そして、この後こそ自分「独自の」意見だととらえる学生が一定数存在する。

【レポート2】の評価でもよく見られたのだが、自分が感じたことが自分「独自の」考えであり、それがあつのがよいと考える学生が多いのである。それが客観的事実ではなく、私的な体験という主観性が全面に押し出されたものを根拠にしていると判断しながら、それでも、その人「自身」が考えたことであるならそれが意見として書かれていることを評価すべきと考えるわけである。

調べた客観的事実を元に論理的に導き出された結果／結論は、えてして自分「独自の」意見にはならない。だからこそ、その結論について自分がどう思うのかを付け加える必要があると学生は考える。

教員がシラバスに明記している「評価基準」にも、「独自の視点」「自分なりの」といった言葉は散見される(2021年度前期、1年生が履修可能な科目102のうち17の科目でこれらの言葉が見られた。16.6%)。

この「独自の」「自分なりの」視点／考えというのは、果たしてどこに表れるのだろうか。レポートではなく論文であれば、それは「問いの立て方」に表れるのではないかと筆者は考えるが、レポートにおいてそこまで求めることが果たして可能なのだろうか。

たとえば、レポートの書き方の参考書として有名な井下千以子の『思考を鍛えるレポート論文作成法』(慶應義塾大学出版会、2019)では、「小学生にスマートフォンを持たせるべきか」という問いが立てられ、レポートの実例が示されている。このレポートに、「独自の」「自分なりの」考えを

求めるのは少々手強い。結論／自分の意見は、「持たせるべきである／持たせるべきではない」と二者択一になるであろうからである。

初年次教育科目で扱えるのは、レポート・論文の書き方などの文章作法を身につけることまでである。この初年次教育科目と自分の専門分野とは関係なく履修がなされる共通科目との、そしてまた専門科目との接続が今後問われることになるだろう。

i 「シラバス検索」画面

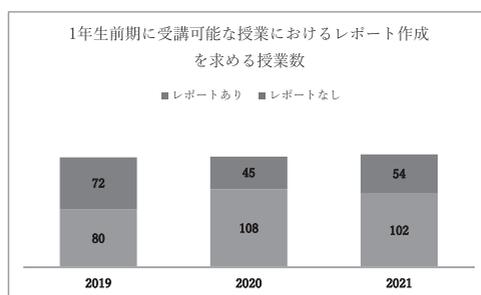
(<https://cs.shirayuri.ac.jp/campusweb/campusportal.do?page=main>)にて、次の条件で検索した結果である。年度：2021年、時間割所属：学部、学期：前期、開講：前期および通年、学年：1年。なお、2021年8月1日時点での結果である。

ii 実際には同一タイトルのもと開講される必修科目でも評価方法が異なる事例は存在する。その場合、「レポート」が課されている授業を標準授業としてシラバスを採用した。

iii 2021年度はその当初より遠隔授業と対面授業がブレンドされるであろうことは多くの大学教員にとって想定済みであり、結果として、教室での試験が難しいことを考え、レポートを課す割合が増えた可能性は大いにある。そこで、新型コロナウイルス感染症が大学教育に大きな影響を及ぼす前の2019年度、多くの大学が混乱のうちに遠隔授業を強いられた2020年度についても注 i に記載したものと同一条件でシラバス検索をし、比較をした。結果は次の通りである。

2019年度前期開講授業：152コマのうち80コマ

2020年度前期開講授業：153コマのうち108コマ



2020年度を境に、レポートを課す授業が増えたことがよくわかる。具体的には35%の伸びであるが、特に2020年度の遠隔授業は学生のネット環境等を考慮し、いわゆるオンデマンド型の授業が多くなり、出席が課題提出とイコールであったためレポートが課される率が高くなったのは当然のことでもあろう。

ちなみに、白百合女子大学においては2020年度の第14・15回分の授業は課題提出で補填されることとなった。そのため、多くの授業でレポートが課された可能性は当然高くなると考えられるのではないかという指摘もあると考えられるが、その追加課題に関してはここでは含めていない。

2020年度からのレポート課題の増加に目が行きがちであるが、しかしそれ以前の2019年度でも半数以上の授業ではレポート作成が課されていたという事実に注目すべきだろう。

- iv 計量テキスト分析の定義は多数あるが、ここでは使用したKH Colderの生みの親である樋口（2014）による「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分解し、内容分析を行う手法」との立場を取る。
- v 2020年度後期に実施した授業であり、履修者のうち1年生のみ53名分の結果に限定している。
- vi ここで学生に示しているレポート例は、山本幸司『大学一年生の文章作法』（岩波書店、2014年）からお借りしたものである。また、この課題の前には、本学の非常勤講師であるジェンダー社会学を専門とする柚木理子先生によるジェンダーに関するミニ講義を学生には視聴してもらっている。柚木先生に感謝申し上げる。

参考文献一覧

- 大場理恵子・大島弥生（2016）「大学教育における日本語ライティング指導の実践の動向—学術雑誌掲載実践報告のレビューを通じて」『言語文化と日本語教育 51』 pp.1-10.
- 串本剛ほか（2016）「東北大学の全学教育におけるレポート作成指導—講義担当教員を対象とした面接調査の知見」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要2』 pp.233-241.
- 菅谷奈津恵（2018）「全学教養教育におけるライティング課題の実施状況—東北大学教員への面接調査から」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要4』 pp.463-473.
- 文部科学省（2009）「高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_19.pdf（2021年8月1日最終閲覧）
- 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室（2020）「平成30年度の大学における教育内容等の改革状況 調査結果のまとめ」
- 前川孝子（2017）「意見文における意見の種類とその変遷—国語教科書（1960年代～2010年代）のモデル作文を資料として」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル9』 pp.64-72.
- 吉本真代ほか（2019）「大学入学者の高校での「書く」経験は変化しているのか—大阪大学入学時アンケートより探求学習に着目して」『大阪大学高等教育研究8』 pp.13-19.
- 渡辺哲司（2010）『「書くのが苦手」をみきわめる—大学新入生の文章表現力向上をめざして』学術出版社

渡辺哲司（2013）『大学への文章学: コミュニケーション手段としてのレポート・小論文』
日本図書センター

渡辺哲司・島田康行（2017）『ライティングの高大接続—高校・大学で「書くこと」を教える人たちに』 ひつじ書房